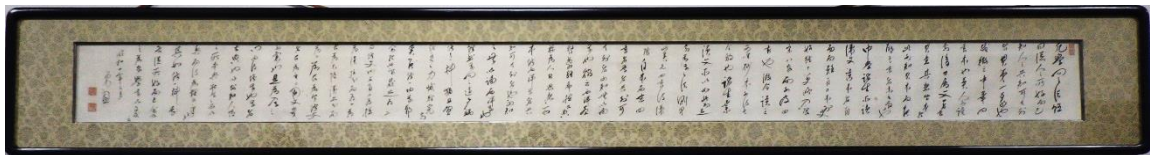


千葉商科大学 総合研究センター

遠藤隆吉研究所 資料調査報告 第1号

「家学の書」



『遠藤隆吉研究所資料調査報告』 発刊に当たって

内田茂男（兼担研究員・学校法人千葉学園理事長）

本学の創設者、遠藤隆吉は少年時から英語、漢文を学び、東西の古典を読んできました。学校時代は常に優等生だったということです。東京大学卒業後、哲学、社会学、歴史学など幅広い分野で研究業績を積み上げています。1928年に本学の前身、巢鴨高等商業学校を設立しましたが、それ以降、研究から教育に大きく重心を移していったとみられています。この間、専門書から啓蒙書、処世訓にいたるまで社会のよりよき発展に貢献する目的で膨大な著作を世に問いました。

遠藤の思考はきわめて肥沃で多様性に富んでいます。大きな柱は次の3つではないかと思えます。

1つは、「パンタライ（万物は流転する）」。古代ギリシャの哲学者ヘラクレイトスの思想ですが、世界は一点に止まっているのではない、常に新しく生まれ変わってゆくということです。これは中国古来の思想にも通じます。遠藤はこの思想をもとに現実の社会の変化をわかりやすく説明しています。

2つは、「孝」。遠藤は『思想講話』の中で中国における道德上の最高概念だと位置付けています。「孝」という家族倫理を国家の倫理に繋げ、そして社会倫理へと敷衍させています。これによって個と社会がつながっているというのです。

3つは、「治道家」。遠藤は、幅広い学問を土台に社会国家を指導する人間でありたい、として、自身を「治道家」と称し、多角的な知識を持った実践者、社会をリードする者だ、と表現しています。

また遠藤は、学問の行き過ぎた専門化、部分化によって全体との関係があいまいになることを戒めています。さらに西洋の文明を学ぶには東洋を学び、東洋を理解するには西洋を学ばなければならない、とも述べています。

ことしは遠藤隆吉が誕生してちょうど150年になります。この記念すべき節目の年に、残された膨大な書籍、文献を整理し、ざわつく世界、わたしたちの日本を見つめ直す新たな視点を探す旅に出たいと考えます。よろしくご支援ください。

『遠藤隆吉研究所 資料調査報告書』第一号刊行にあたって

原科幸彦（兼担研究員・千葉商科大学 学長）

本学の創設者、遠藤隆吉先生は商業道德の涵養を、建学の理念をとしました。遠藤先生が教育の目標とする人材像を「治道家」と呼んでいます。これは高い倫理観を備えた指導者のことです。すなわち、企業や公的機関、市民団体など様々な組織におけるリーダーのあるべき姿です。そのためには、幅広い教養を持ち高い倫理観を備えることが必要で、本学はその教育を目指して来ましたが、人間形成の基盤となる学びです。

文学博士である、遠藤先生は多くの著作を残しました。あまり広くは知られていませんが、その思想は普遍的なもので、本学創設以来、100年近くになる今日も連綿と生き続けています。遠藤先生は特に東洋思想を重視し、「治道家」の育成には武士的精神の注入が必要だとしました。私はこれを、新渡戸稲造が日本のモラルの源泉として整理した武士道のことだと理解しています。自由競争経済のもと、強欲資本主義とも言われるほど拝金主義が行きすぎってしまった今日こそ、求められるものです。

本学では、遠藤先生の思想を改めて研究し、その考えを広く伝えることが今日の社会に対する重要な貢献であると考え、2023年の総合研究センターの設置にあたり遠藤隆吉研究所を設立しました。当研究所の最初の成果が、ここにお届けする『家学の書』の翻刻と書き下し、現代語訳です。家学とは、一つの家で世代から世代へと伝えられる伝統的学問のことです。伝統を継承するという観点から、より広く学問の正しい道とは何かを論じた本書を、ご覧頂きたいと思っております。

遠藤隆吉「家学の書」調査報告発刊によせて

寺野隆雄 (千葉商科大学総合研究センター長)

私が遠藤隆吉の名前を聞いたのは本学に奉職してからである。そして、本学の創始者ということと、学内に石碑があることを知った。彼の思想に興味をもったのは、コロナ下の2022年に基盤教育機構・枅岡大輔先生をはじめとする有志の間で、「生々主義哲学綱要」の勉強会を開催してからであった。残念ながら、この本についてはあまり良い印象がない。遠藤隆吉の著作の一部が切り取られて羅列されているだけだからである。各章ごとに記述にムラと矛盾があり十分な理解ができなかった。

本学の会議室に漢文の額が掲げられていることは知っていたが、この漢文をしたためたのが、遠藤隆吉であり、また、未だその解題もなされていなかったことを知ったのは、本研究センターが立ち上がり、遠藤隆吉研究所が開設されたときの運営委員会の席であった。およそ、創立者の業績は、のちの研究調査によって明らかになっていくものと信じる。慶應大学の福沢諭吉しかり、早稲田大学の大隈重信しかりである。

本調査がきっかけになり、遠藤隆吉の思想があきらかになり、その業績が人口に膾炙することを望むものである。私自身の専門領域は、知能情報学であり分野外である。しかし、このような研究調査に、微力ながら、ICT・AIの技術で協力できたらと考えている。今後の研究の発展に期待したい。

『遠藤隆吉研究所資料調査報告』第一号刊行にあたって

趙軍（遠藤隆吉研究所長）

昨年春に遠藤隆吉研究所が設立され、今年3月にちょうど一年が経ちました。白紙状態からの発足なので、所員一同がまだ手探りで研究活動を開拓していく段階にあります。幸い、遠藤先生が私たちに残してくれた事業的遺産のほか、文化的遺産と思想的遺産が実に膨大なものであり、さまざまな角度からの接近・理解と研究が可能です。そのため、一年来、我々は個人的テーマの研究を進めながら、共同作業の形での共同研究も行ってきました。遠藤先生の諸遺産を整理・研究しながら、解明・継承されていくことは長い歳月をかけて継続していなければならない雄大な作業であるとは存じますが、我々の作業の段階的な成果をWeb上または紙媒体上で公開し、千葉学園関係者をはじめ社会に還元しなければなりません。これは本誌を刊行する所以です。

本誌は遠藤隆吉研究所で調査した資料等に付き、年一回程度不定期で刊行するものです。創刊号にあたる今号は、本学本館612会議室に掲げられている遠藤隆吉先生の墨蹟「家学の書」を翻刻・解説する内容です。いわば千葉商科大学総合研究センター遠藤隆吉研究所の資料調査報告の第一号になります。原稿の作成にあたって、「家学の書」調査・解説班のメンバーである朽木量（遠藤隆吉研究所副所長・千葉商科大学政策情報学部長・教授）と堀和孝（慶応義塾福澤研究センター研究嘱託）の両先生は、この漢文からなる文献を翻刻したうえで、読み下しと現代語訳を加えました。両氏の努力に敬意を払いながら、本研究所初めての研究成果として読者の皆さんにお届けします。

例言

- (1) 本書は千葉商科大学本館6―2会議室に掲出されている、「家学の書」と呼ばれている遠藤隆吉直筆の墨蹟についての調査報告書である。
- (2) 調査は、千葉商科大学総合研究センター内の遠藤隆吉研究所(定常的プロジェクト)が実施した。
- (3) 遠藤隆吉研究所の体制ならびに本書にかかる調査体制は別記の通りである。
- (4) 調査は2023年8月28日に、整理及び執筆作業は同日から2024年2月末日まで実施した。
- (5) 本書の編集は朽木量が行った。
- (6) 「家学の書」の翻刻は堀和孝・朽木量が行い、書き下し文と現代語訳の作成は堀和孝が行った。参考として掲載した「為学之法」は、『巢園集』の原文(白文)をそのまま引用し、その翻刻・書き下し・現代語訳の作成は朽木量が行った。
- (7) 解題・論考はタイトルと共に筆者を明記した。
- (8) 本書の著作人格権はそれぞれの著作者が有し、著作財産権及び著作権は千葉商科大学が保有する。
- (9) 本書の刊行までに次の方々に協力をお賜った。記して感謝申し上げる(順不同、敬称略)。
中島圭一・内田茂男・原科幸彦・千葉商科大学総合研究センター(寺野隆雄・宮澤尚子・谷川健二・高木智也・田村真弓・坂本麻由美)

令和五年度 遠藤隆吉研究所 定常的プロジェクトメンバー

所長 趙 軍 商経学部 教授

副所長 朽木 量 政策情報学部 学部長・教授

兼任研究員 内田茂男 学校法人千葉学園 理事長

兼任研究員 原科幸彦 千葉商科大学 学長

兼任研究員 枅岡大輔 基盤教育機構 准教授

兼任研究員 朱 全安 千葉商科大学 特定教授

「家学の書」調査・解読班

朽木 量 遠藤隆吉研究所 副所長

堀 和孝 慶應義塾 福沢研究センター 研究嘱託

目次

序文	
例言	v
目次	i
遠藤隆吉「家学の書」翻刻	
遠藤隆吉「家学の書」書き下し文	1
遠藤隆吉「家学の書」現代語訳	6
【参考】	8
遠藤隆吉「爲学之法」原文	
遠藤隆吉「爲学之法」翻刻	1
遠藤隆吉「爲学之法」書き下し文	2
遠藤隆吉「爲学之法」現代語訳	4
【解題・論考】	6
「家学の書」と遠藤隆吉の儒学思想の系譜	19

遠藤隆吉「家学の書」 翻刻

凡ソ學問之法雖^モレ

曰^{フト}下^下從^ウニ人之所^ニ一^レ好^ム而已^ト上^上、

知^ル三^三人之共知^シ可^キヲ^ヲニ共知^ス一^一

者其第一義也。

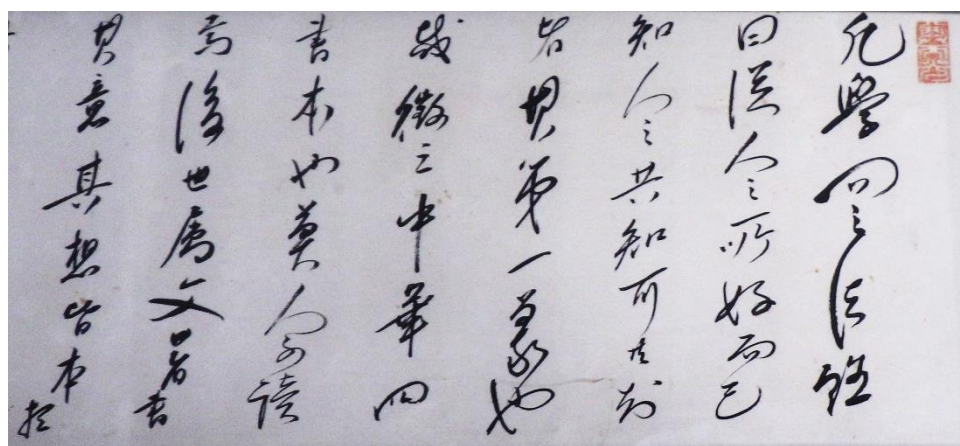
咸^{スル}ニ^ニ之^ヲ中華^ニ一^一四

書^ハ本也。莫^シニ人^不一^レ讀^マ

焉。後世属^リレ文^ヲ著^スニ^ニ書^ヲ

其意其想皆本^クニ於^レ

対応箇所写真（部分）



此^ニ。不^レ知^ラニ其本^ヲ一而能

解^{スル}ニ其末^ヲ一者未^ダザル^ニ之有^ラ一也。

中學諸生所^ノレ讀^ム

漢文讀本者自^{ヨリ}シ

而^{シテ}難^シ。自^ニ日本外史^一

始^メ經^テニ十八史略^ヲ一入^リニ唐

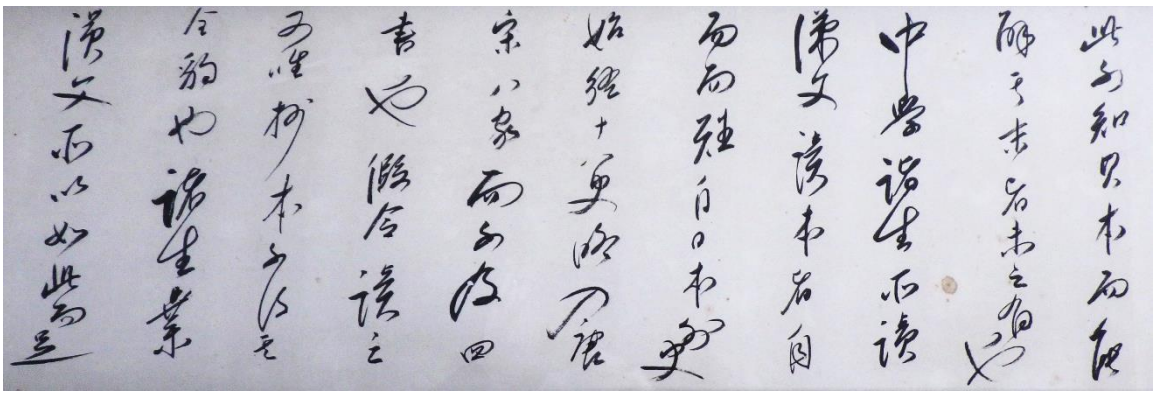
宋八家^ニ一而不^レ及^ニ四

書^ニ一也。假令讀^ムレ之^ヲ

又唯抄本^{ニシテ}不^レ得^ニ其

全豹^ヲ一也。諸生業^{トスル}ニ

漢文^ヲ一所以如^クニ此^レ而足^{ラン}



焉。為_ニ學之法_一則_チ異_レ

此_ト矣。先_ニ四書_ヲ後_{ニスルハ}漢

唐_ヲ自_ラ本_ニ而末_{トスル}四

書_ヲ一_者學者共知_シ可_キ

共知_ス一_者、不_ル三_レ知_ラ無_キヲ_ニ以_テ論_ヲ

學_ブ一_也。徵_{スルニ}之_ヲ西洋_ニ基

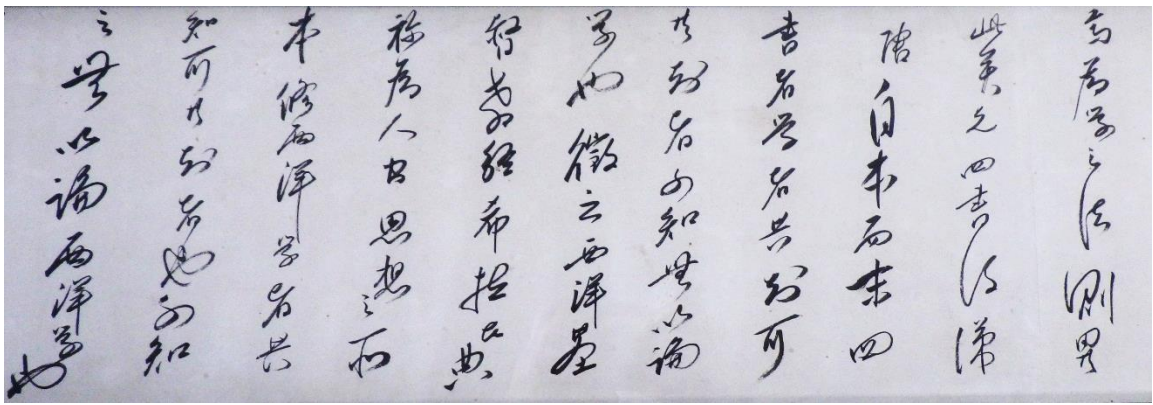
督教經_テニ希拉古典_ヲ一

稱_{シテ}為_スニ人間思想之所_ト一_レ

本_{タル}。修_{ムル}ニ西洋_ヲ一_{學者}共

知_シ可_キニ共知_ス一_者也。不_ル六_レ知_ラ

之_ヲ無_キニ以_テ論_ヲ西洋_ヲ學_ブ一_也。



雖^モ然^リト學問之道^ハ多端^{ニシテ}

修^{ムル}ニ^モ其^一科^ヲ猶且費^{シテ}

終身之カ^ヲ憾^ム難^キヲ完^シ焉。

奚能修^{メテ}一^ヲ功^{セン}學^ヲ耶。

余於^テ此^ニ爾裁定^ヲ為^スニ^ト。

曰^ク修^{ムル}文^ヲ也。文^ニ有^リニ。為^シ拉^ト

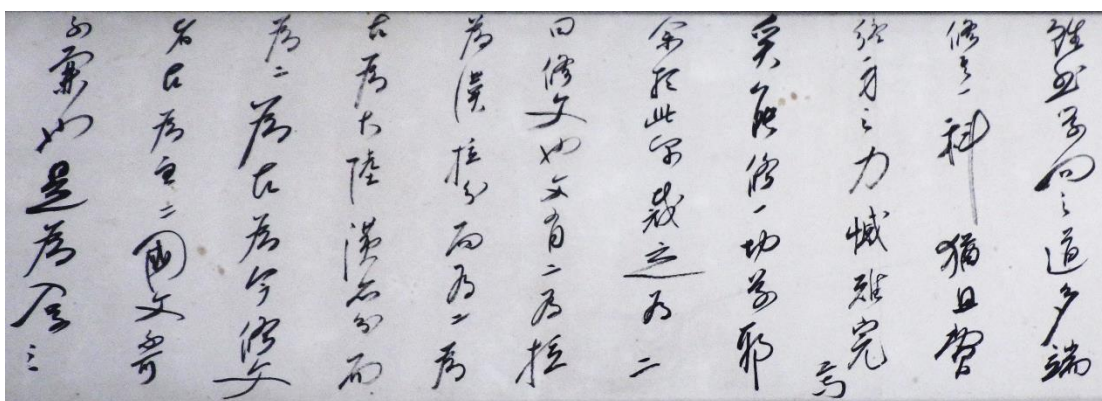
為^ス漢^ト。拉^ヲ分^レ而為^スニ^ト。為^シ

古^ト為^スニ^ト大陸^ト。漢亦分^レ

為^スニ^ト。為^シ古^ト為^ス今^ト。修^{ムル}ニ^ト文^ヲ

者古^ヲ為^シ主^トニ^ト國^ノ文^ヲ不^レ可^レ

不^レ兼也。是為^シニ^ト入學之



門^ト一而^{シテ}後修^{ムル}レ学^ヲ也。学^フ者

古典也。以^テ知^ラ知^リニ人情

之所^ヲ一^レ本^{トスル}與^ルニ社會之所^ト一^ニ以^ト

興^ル。而^{シテ}後為^スニ體^{シテ}レ之^ヲ身^ト一也。

其如^{キハ}レ修^{ムル}ニ一科^ヲ一学^フニ

各從^イ一^レ所^ニ好^ム而已。余以^テレ

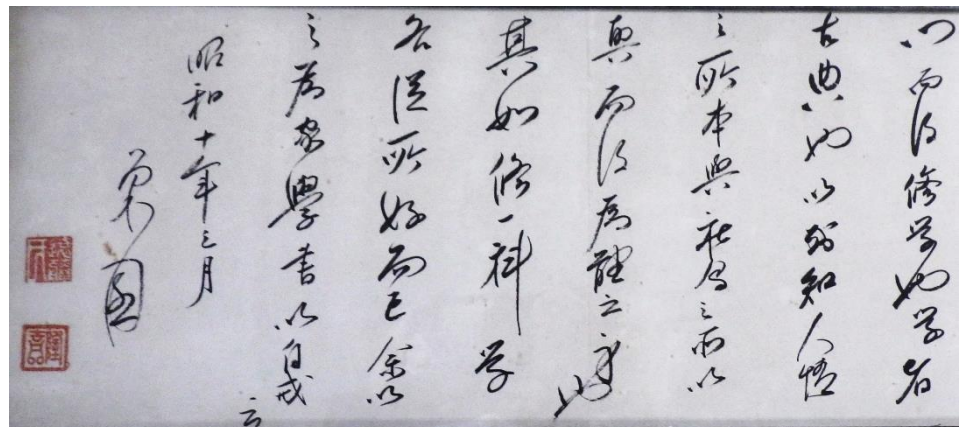
之^ヲ為^シニ家學ノ書^ト一以^テニ自戒^ヲ一云^ウ。

昭和十年三月

巢園

〔関防印〕 尊天光

〔落款〕 遠藤氏(上) 隆吉(下)



遠藤隆吉「家学の書」 書き下し文

凡そ^{およ}学問の法は、人の好む所に従う^{のみ}而已と曰うと雖も、人の共知し、共知すべきを知るは、その第一義也。咸^{みな}これを中華に徴するに、四書は本也。人読まざる莫^なし。後世、文を属^{つづ}り書を著すに、その意その想、皆^もここに本^{もと}く。その本を知らずして、能^よくその末を解する者、未だこれ有らざる也。中学諸生読む所の漢文読本は、自ずよりして而^{して}して難し。日本外史より始め、十八史略を経て、唐宋八家に入り、而^{して}して四書に及ばざる也。仮令^{たとえ}これを読むも、また唯抄本にし

て、その全豹を得ざる也。諸生漢文を業とする所以^{ゆえん}、かくの如くにして足らんや。学の法たる、則ちこれと異なる。四書を先にし漢唐を後にするは自ずから本にして、四書を末とするは、学者共知し共知すべきもの、論を以て学ぶ無きを知らざる也。これを西洋に徴するに、基督教、希拉古典を経て、称して人間思想の本たる所と為す。西洋を修むる学者、共知し共知すべき者也。これを知らざるは、論を以て西洋を学ぶ無き也。然りと雖も、学問の道は多端にして、その一科を修むるにも猶且つ終身の力を費やして、完^まし難きを憾^{うら}む。奚^いんぞ能^よく一を修めて学を功せんや。

余此に於てその裁定を二と為す。曰く文を修むる也。文に二有り。拉と為し漢と為す。拉を分ちて二と為す。古と為し、大陸と為す。漢亦分ちて二と為す。古と為し、今と為す。文を修むるには古を主と為し、二国の文を兼ねざる可らざる也。是入学之門と為し、而して後、学を修むる也。学ぶは古典也。知を以て人情の本とする所を知り、社会の興る所以と与る。而して後、これを体して身と為す也。それ一科を修むる如きは、各好む所に従い学ぶ而已。余、これを以て家学の書と為し、自戒を以て云う。

昭和十年三月

巢園

関防印 尊天光

落款 遠藤氏(上) 隆吉(下)

遠藤隆吉「家学の書」 現代語訳

およそ学問の正しい道とは、人の好むところに従うのみと言うけれども、人々が理解を共有し、また理解を共有すべきことを知るのが、学問の第一義である。そのことを中国の事例で説明すると、四書⁽¹⁾は本である。これを読まない人はいない。後世の人が文章を書いたり書物を著すのに、その意見や思想の源は全てここに発するのである。その本を知らずして末を理解する者は未だかつて存在したことがない。中学生⁽²⁾の読む漢文読本は、自然と難しいものである。まず『日本外史』か

ら始め、『十八史略』を経て『唐宋八大家文』に進むが、四書までは及ばない。たとえ四書を読むことがあっても一部分だけであり、全文を学ぶことはない。漢文を学習するのに、このような方法で十分なはずがないのである。これとは異なり、四書をまず学んでそれから漢代や唐代のものに進むのが正しい道であり、四書を最後にするのは正攻法ではない。そのことを学者は共通して認識し、また認識すべきである。

これを西洋の事例で説明すると、キリスト教、ギリシャ・ラテンの古典を経て、称して人間思想の根本となすのである。西洋学を専攻する学者

は、そのことへの理解を共有し、また理解を共有すべきである。そのことに気付かないでいると、正しい道に則って西洋のことを学んでいるとは言えない。しかしながら、学問の世界は広大であり、一生をかけて一つの分野に取り組んでも残念ながら完全は期し難い。どのようにすれば一科を修めて、充実した成果を上げることができるだろうか。

ここにおいて私は、その可否を裁定して二つとする。文学を例にとろう。文学には二種類があり、一つにラテン文学、もう一つに漢文学がある。ラテン文学はさらに古典文学と大陸文学の二つに分けることができる。漢文学もまた古文と今

文の二つに分けることができる。文学を修めるには古典を主とし、かつ二つの国の言葉に通じていなければならない。これを学問の道に入るための前提とし、その上で修行に励むのである。学ぶものは古典である。人情の根本をなすものを知識として身に付け、社会が発生する所以と関わる。そのようにしてこれを自らの血肉とするのである。どの学科を修めるかは、それぞれの人の好みに従うだけである。これを「家学書」とし、自戒を込めて記す。

昭和十年三月

巢園

註

(1) 『大学』、『中庸』、『論語』、『孟子』の四書。

(2) 旧制中学生の意味。

【参考】

遠藤隆吉「爲学之法」 原文（白文）

爲学之法

凡學問之法。雖曰從人之所好而已。知人之共知可共知者。其第一義哉。徵之中華。四書者本也。莫人不讀焉。後世屬文著書。皆本焉。不知其本。而解其末者。未之有也。徵之西洋。基督教及希拉書。稱爲人間思想之所本。修西洋學者。共知可共知者。不讀之。罔以論西洋學也。然學海汪洋。何處求津。余乃裁定爲二。一曰修文。文有二。爲拉。爲漢。拉分而爲二。爲古。爲大陸。

漢亦分而爲二。爲古爲今。修文者古爲主。而二國文。不可不兼也。是爲入學之門。二曰修學。學者古典。知人情之所本與社會之所興。而後體之身。余以此爲家學。書以自戒云。

（註）句点は原文のまま。

出典… 遠藤隆吉著『巢園集』昭和十二年 巢園學舎出

版部 所収「爲学之法」

遠藤隆吉「為学之法」 翻刻

為_レ学_フ之法

凡_ソ學問之法_ハ。

雖_モ下_下曰_ク從_ウニ人之所_ニ好_ム而已_ト上_上。

知_ルハ_三人之共知_シ可_キヲ_ニ共知_ス一_一。其第一義哉。

徵_{スル}ニ_ニ之_ヲ中華_ニ一_一。四書者本也。

莫_シニ_ニ人不_レ讀_マ焉。

後世屬_リレ文_ヲ著_スニ_ニ書_ヲ一_一。皆本_{ツク}焉。

不_{シテ}レ知_ラニ_ニ其本_ヲ一_一。而解_{スル}ニ_ニ其末_ヲ一_一者。

未_ダニ_ニ之有_ラ一_一也。

徵_{スル}ニ_ニ之_ヲ西洋_ニ一_一。基督教及_ヒ希拉_ノ書_ヲ。

稱_{シテ}為_スニ_ニ人間思想之所_ト一_レ本_{タル}。

修_{ムル}ニ_ニ西洋学_ヲ一_一者。共知_シ可_キニ_ニ共知_ス一_一者。

不_{シテ}レ讀_マレ之_ヲ。罔_キヲ以_テ論_{ズル}ニ_ニ西洋学_ヲ一_一也。

然_{レドモ}学_ノ海_ハ汪洋_{ニシテ}。何處_ニカ求_{メン}津_ヲ。

余乃_チ裁定_{シテ}為_スレ_レニ_ト。

一_ニ曰_ク修_{ムル}レ_レ文_ヲ。文_ニ有_リレ_レニ_一。

為_シレ_レ拉_ト。為_スレ_レ漢_ト。

拉_ヲ分_{チテ}而_為スレ_レニ_ト。為_シレ_レ古_ト。為_スレ_レ大_陸ト_一。

漢亦分_{チテ}而_為スレ_レニ_ト。為_シレ_レ古_ト為_スレ_レ今_ト。

修_{ムル}ニ_ニレ_レ文_ヲ者古_ヲ為_スレ_レ主_ト。

而_チニ_ニ國_ノ文_不レ_レ可_{カラ}レ_レ不_レ兼_也。

是為_スレ_レニ_ニ入_学之門_ト一_一。

二ニ曰ク修ムレ学ヲ。学ハ者古典ヲシテ。

知リニ人情之所レ本トスル與社会之所レ興ル。

而後體ツクルニ之ヲ身ニ。

余以テ此ヲ為シニ家學ノ書ト一以テ一自戒ヲニ云ウ。

遠藤隆吉「為学之法」 書き下し文

学ぶため為たの法

凡およそ學問いへどの法は、曰く人の好む所に従うのみと雖も、人の共知し共知すべきを知るはその第一義かな。

これを中華に徴するに四書は本もとなり。人読まざる莫なし。後世、文を属つづり、書を著すに皆本づく。その本を知らずして、その末を解する者未だこれ有らざるなり。

これを西洋に徴するに、基督教キリスト、希拉ギリシヤラテンの書を称して、人間思想の本たる所となす。西洋学

を修むる者、共知し共知すべきは、これを読まくらずして罔くらきを以て西洋学を論ずるなり。

然れども学の海は汪洋にして、何處いづくにか津を求めん。余乃ち裁定して二と為す。

一に曰く文を修むる。文に二有り。拉と為し、漢と為す。拉を分ちて二と為す。古と為し、大陸と為す。漢また分ちて二と為す。古と為し、今と為す。文を修むるには古を主と為す。而ち二国の文兼ねざるべからざるなり。これ入学の門と為す。

二に曰く学を修む。学は古典をして人情の本とする所と社会の興る所を知り、しかる後これ

を身に體かたちづくる。

余これを以つて家學の書となし、自戒を以て云う。

遠藤隆吉「為学之法」 現代語訳

学ぶ為の方法

一般に学問の方法は、人の好む所によるのみだといつても、人が共に知り共に知っているべき事柄を知っているのはその第一義である。

これを中国の事例に求めると四書は基本である。これを読まない人はいない。後世の人が文章をつづり、書物を著すときに皆これにもとづいてゐる。その本源を知らないで、その末端を理解する者は未だ居たことがない。

これを西洋の事例に求めると、キリスト教、ギ

リシャ・ラテンの書物を称して、人間思想の基本であるとしている。西洋学を修める者が共に知り共に知るべきであるものは、これを読まないでいては、無知であるままに西洋学を論じていることになる。

しかしながら、学問の海は広大であつて、どこに港を求めることができようか。そこで私は、対象を二つに分割する。

一つ目は文学を修めることである。文学には二種類があり、一つにラテン文学、もう一つに漢文学がある。ラテン文学はさらに古典文学と大陸文学の二つに分けることができる。漢文学もまた

古文と今の文の二つに分けることができる。文学を修めるには古典を主とし、かつ、この二国の文学を並行して修めなければいけない。これが学問に入る時の入口となる。

二つ目は学問を修めることである。学問というものは、古典によって人情の基本とする所と社会が興隆する所を知り、その後でこれを身につけるのである。私はこのことをもって、「家学の書」として自戒を込めて言っている。

【解題・論考】

「家学の書」と遠藤隆吉の儒学思想の系譜

朽木 量

一．「家学の書」について

遠藤隆吉の「家学の書」と呼称される墨蹟は、現在、千葉商科大学本館6―2会議室に掲出されている。額縁の裏面がかなり強固に固定されているため、額から取り外しての観察ができないが、額装状態での当該文書の寸法は縦18.5センチメートル、横237.8センチメートルを測る。額縁全体では縦35.2センチメートル、横は269.6センチメートルを測る。継紙に草書体で墨

書されている。内容は、学問を修めるためには、中国の四書やギリシヤ・ラテン語の古典に直接あたることの重要性が説かれている。書かれたのは、昭和十(一九三五)年三月の紀年表記があるため、遠藤隆吉六十二歳の書であることが分かる。この年は、遠藤隆吉にとって大きな事績はないが、巢鴨中学創立から十二年、巢鴨高等商業学校(千葉商科大学の前身)創立から七年後のことである。

この書は、千葉商科大学の教員であり、遠藤隆吉の娘婿にあたる黒田直竹教授の私家蔵であったものを、後に黒田教授から千葉商大に寄贈されたものである(黒田1977)。能筆家でもあった遠藤隆吉は、多くの書

を残しているが、千葉商科大学が所蔵するものとしては、この書が数少ないものの一つである。

二、「家学の書」の内容と「為学之法」との異同

「家学の書」は、本調査報告書に【参考】として掲載した『巢園集』所収の「為学之法」と内容的には酷似するが、旧制中学の生徒を念頭に書かれ、漢文学習における順序や、四書といった原典にあたることの重要性がより詳細に書かれている点で異同がある。特に、漢文学習は多くの場合、日本の歴史家であり思想家の頼三陽の『日本外史』から始め、中国の南宋までの正史を要約した歴史書『十八史略』、唐宋の散文集である『唐宋八家文読本』を経て、『大学』『中庸』『論語』『孟子』の「四書」になかな

か至らずに終わったり、「四書」は抄本で済ましたりすることを嘆き、思想的に源流である「四書」から始めるべきであることを説いている。この『日本外史』から「四書」までの下りが「家学の書」の特徴であるといえる。

また、内容・表記に多少の異同はあるものの、「家学の書」と「為学之法」の両方で協調されているのは、西洋を学ぶ際にも同様に、キリスト教だけでなく、ギリシャ・ローマ(ラテン)の古典も学び、思想の源流から順に末端に至るまでを学ぶことと、漢文とギリシャ・ローマの古典の両方を学ぶことの重要性である。

次に、「為学之法」と異なり、「家学の書」は墨蹟であることから、関防印と落款を伴う。遠藤隆吉の関防印

と落款は複数種類存在することが『巢園自伝』等の本に所収された墨蹟により確認できる。中でも「家学の書」に押された「尊天光（天の光を尊ぶ）」と書かれたこの関防印は、昭和五（一九三〇）年十月三十日に教育勅語渙発四十年記念式にあわせて巢鴨学園三層楼上に天照大神及び釈迦・孔子・キリスト・ソクラテスの四聖を祀った遠藤の思想を反映する印影となっている。

三． 前橋における江戸く明治期の儒学教育

次に、遠藤隆吉の儒学思想の系譜を辿るために、前橋（前橋藩松平家及び明治時代初期の前橋での学校教育）における儒学教育の状況について詳細な記述のある『前橋市史』第三卷、『前橋市教育史』上卷、『埼玉県教

育史』などに依拠しつつ概要を摘記する。

『前橋市史』第三卷（八〇三頁）によると、酒井氏に代わって前橋に入封した松平朝矩（ともりのり）（前橋松平家五代目、初代川越藩主）はまもなく室鳩巢の高弟河口静斎を儒員として召抱えた。河口静斎は名は光遠、字は子深、穆仲、通称は三八と称し、江戸時代前期の儒学史をまとめた『斯文源流』や、朱子学の初学教育書である『小学』について論じた『静斎小学弁評』等の著作で知られる人物である。室鳩巢の弟子であるから木門派（木下順庵）の朱子学の流れをくむ人物であるが、藩校の創設までには至らなかった。その後、前橋松平家は、利根川の浸食による前橋城廃城を受けて川越に移城し、前橋は

陣屋のみが残されると共に、僅かな藩士のみが残った。川越移城後も六十年ほどの間、文教政策は振るわなかった。藩校が創設されるのは文政十(一八二七)年七月二十四日前橋松平家八代目・四代目川越藩主の松平齊典なりつねの時であった。川越に設けられたこの藩校は、「講学所」と称し、藩主自ら次に掲げた直筆条目を下附して程朱学(＝朱子学)を正学とし、異説を禁じている。

御直筆御条目

一 学問は人たるの道を知て是を身に行ひ、己を修め人をも治むべき為にてあれば、徳行は本なり、文芸は末也と思ふへし

一人の行ふべき道其端多か中(ママ)に、忠孝を以て本とす

る事誰か是を知らさらむ、しかはあれと其真実に知り、真実に行へる事を貴ふへければ、其余の百行みな然り、かの徒に能く口に語れるハ貴へきにあらずと思ふへし

一 すべての人皆恥を知らさるへからず、況や士に於てをや、是を知れば善き人と成て道ニ聖賢の域にも至りなん、是をしらさるは人面にて獣心なり、心道理に暗く身礼義を行はず、其才能も亦職務に応するに堪さる事を恥へけれ、家貧して夜食などのあしきハ決して恥へきにあらずとおもふへし

一 自他ともに恭敬を厚くして貴賤長幼の礼法を正

しくすへし、仮にも戲謔の言傲慢の行有へからす

一 聖人といへとも己をすてて人に従ひたまふといへり、

されハ常人に於てハ猶更の事なるへし、必らず過ち

を改るに吝かにして、師友の教誡に戻り我意を張

る事有へからす

一 學術は孔孟程朱の正派を崇ひ守るへし、其大意師

儒二命して撰み定めさせたる講学所學役読書次

第に見へたり、必らず異説を唱へ、正學を妨る事

有へからす

右之条と固く守り可相學者也

文政十丁亥

「藩日記」(『前橋市史』第三卷 八一―一頁所収)

講学所では藩主松平齊典の意図に基づき保岡元吉

に校訂を命じて『校刻日本外史』(『川越版日本外史』)

を出版し全国的に知られた。しかし、齊典の死後、安

政二(一八五五)年には一年間の休校を余儀なくされ

るまで衰退するに至った。前橋松平家十代目・川越藩

六代目藩主の松平直侯なおよしの治世になると講学所は再整

備され、職員も創立当初を上回る五十一名となった。

この改革を推進した松平直侯は水戸の徳川齊昭の実

子であり、文教政策においても水戸学の影響は少な

くなかったと考えられる。また、この方針は次の藩主松

平直克なおかつにも引き継がれることとなる。慶應三(一八六

七)年の前橋帰城が幕府に許される前年、慶應二(一

八六六)年三月二十六日前橋城大手馬出しの外にあつた陣屋を講学所として整備し、稽古を始めることが布告された(『埼玉県教育史』)。明治元(一八六八)年十二月には、改めて学問を尊重し、講学所を博喩堂と改称することが布告された(『前橋市史』第三卷八一五頁)。

版籍奉還の後、松平直克が辞任し、松平直方なおかたが藩知事になると学制局をおき、博喩堂の職制も変更した。さらに、明治四(一八七一)年正月には新学制発布までの暫定的措置として博喩堂の機構を踏襲しつつ、文武学校を設置した。明治五(一八七二)年に学制が公布されると藩校は廃されたものの、博喩堂の敷地に

一番小学校厩橋小学校が新設された。教員も多くが実質的に継承され、明治六(一八七三)年の「学校設立伺指令」(群馬県立文書館蔵)では前橋小学校ほか六校の教員三十五名中、藩校教育に関係する者が二十三名と全体の六割を占めていた(『前橋市教育史』上卷 一〇五頁)。明治十四(一八八一)年には群馬県立前橋中学校(当時は群馬県中学校と呼称)の初代専任校長として、水戸学の泰斗である内藤耻叟が招聘されている(『前橋市史』第四卷 四九四頁)。このように、博喩堂を中心とする旧藩時代の漢学教育は、明治以降の近代教育の初期においても引き継がれ、大きく影響していたといえる。

四・遠藤隆吉と水戸学

こうした幕末～明治期の前橋における漢学教育（とくに水戸学）の変遷を踏まえつつ、遠藤隆吉の儒学思想の系譜と「家学の書」を読み解いてみたい。

先述のように、「家学の書」は漢文学習の順序に言及している所に特徴がある。さらに、後世の『日本外史』や『唐宋八家文読本』よりも、まずは「四書」に取り組むように述べている。この原典である「四書」にかえろうとする発想は伊藤仁斎らの古学派や荻生徂徠の古文辞学派のそれに近い。『巢園自伝』によると、遠藤は幼少時以来、多くの師について漢学を学んでいる。最初は、隣家の野島一郎とその弟小林銃三郎に習

った（『巢園自伝』二六頁）。同時に、前橋で古道具屋を営む古澤庸軒にも影響を受けた（前掲書二七頁、三〇頁）。この野島・小林・古澤の三者がいかなる儒学の系譜に連なる人物であるかは管見の限り定かではない。しかし、最も多感な時期である中学校では、中西弘造に習っていたとされる（前掲書二七頁、三八頁）。この中西弘造は天保七（一八三六）年江戸の芝愛宕下の生まれで、代々松平氏に仕える家柄であった。十歳で佐藤一斎の門人宇津木弘に従って七年学んだ。その後、父に従って水戸に行き、水戸の儒者会津恒蔵、秋山興、隠井淡路等に従って国学及び儒学を学んだ（註一）。安政四（一八五七）年川越より厩橋に転じて、

（ママ。会澤カ）

藩儒保岡正太郎に漢学を学び、博諭堂助教となった。また、同時期に私塾も開いている。明治になると前橋の教員伝習所に入って教則を学び、いくつかの小学校を歴任した上で、明治十二（一八七九）年県立中学校教師となった人物である（『前橋市教育史』上巻一七八頁）。水戸に遊学し、徳川斉昭の実子である藩主松平直侯が再整備した講学所で助教となったことから、水戸学の影響を受けた人物であったと考えられる。

これらの漢学の師の影響を受け、遠藤隆吉は中学生時代には、水戸学の藤田東湖に傾倒していた。『巢園自伝』によると、「私は中学の四年頃には藤田東湖

の正気歌であるとか、弘道館記述義であるとか云ふやうなものを精神を引き立たせるものとして愛読して居った。それが今日になっても身心の滋養分になって居るのであらうと思ふ」と述べている（『巢園自伝』二九頁）。藤田東湖については、父遠藤千次郎も高く評価していた。『巢園自伝』によると、父千次郎は「藤田東湖を推賞して居ったが、時々言ふて居た。興大院様（厩橋城主にして水戸より養子に來られた方）が御養子に來られる時には藤田東湖が家老山田氏の許に度々手紙を寄せられ、山田家には沢山あつた筈だが如何したか惜しむべきである」と述べたり、「東湖は安政二年の地震に一旦は出たが、老母の居るに気付き

更に入って之を救ひ出し身を以て梁を支へ、死んで了ったのだといふことだが親孝行のものだと非常に感服して居った」そうである(前掲書一二頁)。遠藤隆吉は、藤田東湖についての「此れ等の事実如何は保証の限りでないが、私に取っては一種の刺激となつたらしい」と述べている(前掲書一二頁)。また、荻生徂徠についても、「漢文であれば徂徠を学び、社会学ではアメリカの心理学派から影響せらるゝこと多大であるといふ具合だ」と述べている(『巢園自伝』一〇四頁)。このように『巢園自伝』を見る限り、遠藤隆吉が水戸学や古学派に傾倒していたことは疑い得ない。

さて、水戸学は古学をどのように捉えていたのだら

うか。そのことについては、会沢正志斎が「伊藤仁斎は徳を尚び行を修め、当代の儒宗たり。首め古学を発明し、後人の説と聖徑とに同異あるを弁ず。而して拈充・長養の旨、日用常行の義を論ずること、極はめて詳明なり」(『下学邇言』卷之二—三〇四)と述べるのとともに、「凡そ聖賢の法は、その意は美と雖も、古今宜しきを異にす。其の跡に必ずしも泥^{なす}むべからず。其の意は即ち以て師法とせざるべからず。斟酌損益して、之を活用するは其の人にあり」(『下学邇言』卷之二—二七四)と述べて、伊藤仁斎が孔孟の聖語と後世の訓詁学の成果とを区別したこと、日常の生活経験を重視する実学的なプラグマティズムを展開してきたこと

を高く評価している。「建学の趣旨」に見られるように（註二）、遠藤隆吉もまた実学的なプラグマティズムを重視していることを考え合わせると、「家学の書」に見られる「四書」重視の発想は古学派と、古学と国学とあわせて発展させた水戸学の思想に由来すると考えられる。

五．遠藤隆吉と井上哲次郎

次に、「家学の書」にみられるギリシャ・ラテンの古典への言及について考えたい。先述のように、「家学の書」では、漢学の古典に対するのと同様に、ギリシャ・ラテンの古典に学ぶことが推奨されている。この発想は、大学時代の師である井上哲次郎に負うところが大きい。

遠藤は、『巣園自伝』の「学問は誰れの継承か」の中で以下のように述べている。「直接教へを受けた先生としては井上（哲）先生があり、元良勇次郎先生がある。井上先生は博覧強記古今絶倫の人であり、何処を学んで宜いか分らないが、私の最も影響されたのは学、東西に偏せないといふことである」（『巣園自伝』一〇四頁）。この一文だけでも、「家学の書」の中で漢学とギリシャ・ラテンの古典をともに重視する理由が、東西に偏せないという考えにあることが分かる。

さらに、『遠藤隆吉伝』によると、逝去の際に机上に残された大学ノートには「東西文明の連絡」の文字があったとされる（『遠藤隆吉伝』三一七頁）。また、遠藤

が最も重視した儒学の概念の一つである「孝」についても、著書『孝経及東西洋の孝道』において、ギリシャ古代における「孝」概念の検討に多くの紙幅を割いている。こうしたことから、遠藤が師である井上哲次郎の「学、東西に偏せない」ということを如何に重視していたかが分かる。

六・ 四書の心理的表象

先述のように、遠藤隆吉は大学時代に直接教えを受けた先生として井上哲次郎とともに元良勇次郎の名も挙げている。遠藤は「元良先生は心理学の泰斗であった。私の考へ方(Denkens Weis)は全く先生に出たといふて宜い。即ち物事を心理学的に考察する

のが私の習慣である」と述べている(『巢園自伝』一〇四頁)。その意味で四書を学ぶことの意義と長所を、遠藤は『経史説林』の中で心理的表象として述べている(遠藤1908)。「家学の書」ではこの心理的表象について明示的に書かれているわけではないが、遠藤が四書についてどのように考えていたかを知る上で重要な点で、このことにも触れておきたい。さて、その心理的表象は感覚的連想と中心的連想に大別される。感覚的連想とは和綴じで漢字ばかりが並ぶ四書の外観により①厳しきこと、②堂々たること、③古めかしきことの三点が四書を学ぶ上で連想されることとして挙げられている。中心的連想としては①社会的根柢がある

こと、②崇高の感を与えること、③温順の感を伴うこと、④遠大高尚の理想を与えることの四点を挙げてい
る。社会的根拠とは我々の祖先と同じ書物を読むこ
とにより社会に根差していると実感することをさす。
崇高の感とは非難されることの少ない人格者の言であ
ると思うと自ずと崇高なものに感じるといふことをさ
す。温順の感とは、角のない聖賢の語に何となく優し
さを感じることをさす。遠大高尚な理想を与えるとは、
少年にとって意味は理解できずとも何となく高尚な理
想的人物像が吹き込まれることをさす。このように、
遠藤のいう心理的表象とは、漢文の読み方の学習や、
古代中国の思想の理解といった直接的な学び以外に、

学習者である青少年に心理的な好影響を与えるもの
であると考えていた。この観点は「心理学的に考察する
のが私の習慣」とまでいうだけあって遠藤独自のもので
あろうが、「家学の書」において遠藤がとりわけ四書を
重視する理由の一つであると考えられる。

七. まとめ

以上のように、「家学の書」に依拠しつつ、遠藤隆吉の
幼少期、中学生時代、大学での学びに沿いながら、そ
の時々で得られた儒学思想の系譜を述べてきた。「家
学の書」は、遠藤の学問（とくに漢学）に対するスタンス
を述べると共に、人々が共に知り共に知っているべき事
柄を知っていることの重要性を若い学生たちに伝えた

文章である。九十年近くが経過した今であっても、現代の大学生たちにも読ませたい内容となっているが、草書体で書かれた「家学の書」は、今や見る人にとって難解なものになっている。この資料研究報告が、「家学の書」の内容に触れたいと思う全ての人の一助になることを願うばかりである。

〈註〉

(註一)

『前橋市教育史』上巻には会津恒蔵とあるが、当該人物は特定できない。津と澤の草書は酷似するため、会澤恒蔵(会澤安・会澤正志斎と同一人物)の誤記と

考えられる。

(註二)

遠藤隆吉「建学の趣旨」全文は

「能力を外にして長幼の序を認め、為にする所なくして人格の光を仰ぎ、天道の自ら至るを恐れ人倫の當に依るべきに従う。人類を一視して其の幸栄を増進し、有用の學術を修め質実の氣風を養い、適く所として其の天職を完うせんとす」(『巢鴨精神』六頁)であり、当該文中の「有用な學術」のくだりに実学重視の考えが表れている。

〈参考文献〉

会沢正志斎1847『下学邇言』(高須芳次郎編19

33『水戸学全集第二編会沢正志集』日東書院)

蝦名賢造1989『遠藤隆吉伝』西田書店

遠藤隆吉1908「四書の心理的表象」研経会編『経

史説林』文昌閣 240—250頁

遠藤隆吉1935『巢鴨精神』巢園学舎出版部

遠藤隆吉1936『孝経及東西洋の孝道』巢園学舎出

版部

遠藤隆吉1938『巢園自伝』巢園学舎出版部

片貝高四郎1993『前橋市域にある筆子塚の調査

報告書』第二集 私家版 前橋市立図書館蔵

朽木 量2021「巢鴨商業学校設立趣意書における

『武士的精神』の意味」『CUC view & vis

ion』52

黒田直竹1977「遠藤隆吉博士を偲んで」千葉商科

大学創立50周年記念誌編集委員会編『創立5

0周年記念誌』千葉商科大学創立50周年記念

事業実行委員会

前橋市教育史編さん委員会1986『前橋市教育史』

上巻 前橋市

前橋市史編さん委員会1975『前橋市史』第三巻

前橋市

前橋市史編さん委員会1978『前橋市史』第四巻

前橋市

町田 三郎 1990 「遠藤隆吉 覚書」『哲学年報』49

37-77頁

2024年3月29日印刷

2024年3月31日発行

千葉商科大学 総合研究センター

遠藤隆吉研究所 資料調査報告 第1号

「家学の書」

編集 千葉商科大学 遠藤隆吉研究所

発行 千葉商科大学

千葉県市川市国府台一丁目3-1

印刷 千葉商科大学ドキュメントセンター